

体験を力に ②

無加温出芽育苗の成否

指導部顧問 松浦 一 宇

田植機イナ作

無加温出芽方式でスタート

庄内・由利農業に田植機が本格的に普及し始めたのは昭和46〜47年（1971〜72年）頃、今から45年ほど前のことである。

これまでの水苗代や折衷苗代とちがって、まったく未知の世界といったことから指導機関や農機具メーカーなどの指導にしたがって、一定の温度が確保できる育苗器による加温出芽方式が一般的であった。

安全で確実な出芽ではあるが、播種（1）育苗器に積みかさね（2）

幌やハウスに並べるといった工程で、手間暇がかかり過ぎる事や、出芽完了まで真つ暗な為に、芽が伸び過ぎになる欠点もあった。当時の我家では、育苗器を買う資金や労力不足を理由に「無加温出芽」によるハウス育苗としたのである。

その当時は手廻しの播種機でまき、ハウスに並べてから「かん水」「覆土」写真1といった工程であった。

経営規模も2町8反程度と少なく、また、播種量も厚まきで10a使用箱数が20枚位であったので、家族労力だけで何とか間に合った

ものである。

箱並べから5日間の

適温管理の重要性体得

現在では育苗器をつかっているのは稀で、大方が無加温出芽でのハウス育苗となっているが、当時、周囲ではほとんどやっていた方法でやる不安は、大変なものであった。

特に、地球温暖化が進行した今日と違って、45年前は播種・箱並べから出芽までの温度確保に苦労したものである。

写真2は、ハウス内に幌を造りホットンカバーで夜や日中でも寒い日に被せて低温障害の回避や素早い出芽揃いに努めた。結果は、写真3にあるように、たつたいま角刈りでもしたかのような揃った苗が出来た。

近年、平成10年（1998年）頃からは温暖化が進行、育苗初期の高温による障害で失敗する例が多くなったように思われる。

③ 根の生育不良でマット形成が著しく低下する。

◎高温が続いた場合

① 35℃以上の高温による苗焼け（最悪の場合死滅）。

② 高温・加湿等によるリゾクトニア菌・トルコデルマ菌・リゾプス菌等による立枯病。

③ 軟弱徒長苗やバカ苗が発生し易くなる。

尚、鞘葉が展開し、次の不完全葉に葉緑素（緑色）が出来れば苗自身が温度調節機能を持ち、抵抗がついて多少の高温・低温に

も耐え得るものである事も体験から知り得た。温暖化現象が進行中の昨今では遮光資材（ダイオシード）だけの適温管理に難儀することが多いので、写真4にあるような天窓等を備えた育苗ハウスとしている。また、育苗中・後期は外気温も高まり、サイドだけの換気では適温管理は難しい場面が多々ある。写真5は茨城県の稲作農家浅野氏（本誌読者）の育苗ハウスで、天窓・肩・サイド開閉装置をフル装備して適温管理に努めている様子である。

このような設備があれば理想的な温度管理が出来るので参考までに記した。

◎苗の搬入出の省力化

写真6は、出来上がった苗を軽トラに搭載して移植する田んぼに運び出す様子である。コンパネを半割にして車道に敷く事で、ワダチも出来ず省力で且つ便利である。



写真4 遮光資材（ダイオシード）の下で天窓を開けている所



写真3 育苗箱は木箱で無加温出芽でもソックリ揃った苗



写真5 天窓・肩・サイドの開閉装置の整ったハウス



写真6 コンパネを敷き軽トラでの苗出し入れ自在に



写真2 ハウス内に幌も併用した育苗の様子 (S.47)



写真1 ハウス内でかん水と覆土 (S.47)